

御仕置五人組帳

読解提供

岩田善市

所在 佐伯市下堅田字波越

源太正巳氏方

表紙

文化十二歳

御仕置五人組帳

亥正月

本表書フリントに若干誤りあり  
正誤二十八頁下段に於て

一 從

公儀被 仰出候前々御法度の趣村中大小百姓下人等ニ  
到迄弥堅相守之可申事

一 御治世

御志を請百姓安樂心休耕<sup>（心）</sup>時ニ隨ひ農業  
相勤外事末々之者迄朝暮難有可奉存外事

一 切支丹宗門

儀累々御制禁の通堅相守五人組切常心  
を附不審成もの旨之ハ早速可注進之若隱置他所分顯ニ

おいては庄屋五人組は不及申一類共ニ急度曲事可申付  
外勿論去ル辰歳分毎年宗門の儀毎人別且那寺印形ヲ取

帳面ニ仕立ニ月中旬迄御彼所ニ差出可申候尤四月上旬  
為宗門改廻村の節右帳面ニ引合相改外且又寺は一寺の

仕備并隱居真宗寺以後住に可成惣領共山伏且官位仕  
もの斗除之其外妻子弟子召仕等日百姓同前古帳面ヲ  
以引合相改可申外兩度ノ書物の儀は六月十二月可差出  
外事

附り寺院の儀は其本寺ノ末寺ニ紛無之段証文取之  
可差出并社継目の節は可申出外事

一 古切支丹類族死失出生縁組離別養子住所替仕ハ其  
時ニ可注進ハ尤違変無之候其段ニ季に届書可差出事

一 百世身持の儀聊ニても奢ケ聞敷儀不仕惣て目立外家作  
不仕并衣類の儀庄屋妻子ヲ始末々之者迄緇結類は袖口

半襟等にも不仕却て百姓ニ不似合品着用仕聞敷外尤無  
益の器物等ヲ不調第一農業昼夜無油断出措仕浦方山

方稼助成に可成儀は見指縁之諸物潤澤ニ 帳ニ遣ハ  
捨不申食物且雜穀を第一に在し尤幼少又及年等ハ

稼不成土のは草木の突葉根其外時々の物を取置外て夫  
食の左りにいたし雜穀ヲ貯置凶年の節不及飢に百姓相

續ハ縁ニ兼て心耕はけむへき事  
一 親に孝を尽し下人日主人を大切仕奉公ニ措ヲ出夫婦兄

弟諸親類にむつましく下人等に憐愍とくわふへし惣て  
百姓傍輩物事左の毛しく順路ニ可仕外若不忠不孝の者

有之は異見仕其儀不相用輩ハ其旨書付ニ記可申出外切  
論至て孝心成土の又は勝れて奉公出措仕ハもの并人極

實辨ニて人の為にも成り途迄ニても沙汰いたしハ程の  
者有之は其旨可申出外事

附り百姓不似合致風俗又は長脇指をさしハ儀令停  
止外并男女共ニ衆物乗鞍乘り可聞敷外且又浪人寺

社たりとも田畑ヲ作外ものハ諸事百姓同前ニ可相  
心得外

一 博奕惣て賭の諸勝負或は商ハに事等博奕似たる儀何に  
ても一切仕聞敷外勿論右の類の首宿等堅仕聞敷外事

附ノ大酒醉狂仕間敷事

一 米穀ノ糶損失無之能出来ハ様心掛可申ハ尤有米田畑損  
毛無之様被 仰出ハ若疎略ハいたし少ノ所ハてモ荒作  
ノ様於致置ハ吟味ハ上地主ハ不及中庄屋組頭迄急度可  
申付ハ独身ノ百姓長頼又ハ夫に離れ或ハ幼少ハて親ハ  
離れ料理仕付難成者有之ハ庄屋組頭立会村中助合田  
畑不荒様ニ可仕ハ且又分たわに成リ又ハ不意ノ難に  
い身上衰難立有有之ハ親類ハ不及申庄屋組頭申合助抱  
心添可致事

一 惣テ永荒地ノ内審入ハ得且立返可申事ニハ得共其地主  
斗力力ハて取返ハ事難成幾年過ハてモ打捨置ハ分ハ村  
中大小百姓助合起返シ可申ハ村中ハて起返ハ儀難成或御  
普請等被 仰付ハ立返可申事ニ有之ハハ、可申出事

一 新田畑出来ノ儀古田畑林場等ノ障ハ不成場所ハ格別古  
ノ障有之場所ハ時察仕間敷事

一 田畑少ノ所成共荒地起返又ハ切添切開事仕ハ及古トハ  
老歩ノ取老ハ、いとモ無隱可申出若隱田隱野ノ地有之  
ハ当人ハ不及申詮儀ハ上地隣ノ者并其村庄屋組頭五人  
組迄急度可為由事

附ノ本用畑ニ煙草仕ハ儀御停止ハ事

一 用水堰川除溜井浚ノ普請等常々無油断致修葺田畑損毛  
無之様ハ可心掛七出水ノ節ハ堤川除不損様ニ兼テ村中  
申合固可申ハ小破ノ節捨置及大破ハハにおいてハ吟味  
ハ上庄屋組頭可為越度ハ且又御普請人足扶持方被下ハ  
以当座敷百姓割賦仕録ハ小前切受連判ノ証文可差出之  
惣テ御扶持方米銀等納物ノ代りに庄屋百姓継合勘定仕  
間敷事

一 御村用水ハ儀先規ノ例ヲ以可引之反湯水躰ニハ其段  
可辨之我儘ニせきいたし又ハ切落取申間敷ハ且又井路  
堀を埋或ハ道ヲ扱ハ林場林を切添田畑仕出作毛仕付申

間敷ハ七新道新振等無断仕ハ庄屋組頭可為越度事

附ノ水論境論等無之様兼ハ心掛可申付ハ万一口論  
等致ハハ節脇指惣テ及物等持出令荷担ハモ有之  
其科本人よりおま分るヘキ事

一 田畑永代賣買并糶納賣買一切仕間敷ハ貸地ノ年数は拾  
ケ年ヲ限リ其餘ノ永年番日御停止ニハ御年貢諸役等費  
ニ取ハ者より相勤ハ様ニ可定事

一 田畑貸地金銀米錢貸借証文庄屋加判寸ヘハ庄屋自分ハ  
貸地貸借及相在屋無之ハ且組頭加判寸ヘハ事

一 田畑質地不相立ニ高直ニ相極中間敷ハ金銀米錢貸借ハ  
儀モ高利ニ不可仕ハ事

一 質田畑并金銀米錢貸借相滞及出入時ハ早速可申出ハ尤  
年久敷儀、且取上無之ハ事

一 却テ質地ハ儀前ノノ被 仰出ハ趣堅相守日末ノ者  
迄承届羅有心得違無之様ハ可仕事

一 百姓持高分々申儀若ハ前拾石ノ内ニ當リハ及取当不仕  
不或惣領ニ讓ヘシ惣テ分地致ハ朝或ハ新殿ニ百姓有付  
ハハ可注進跡式ノ儀存生ハ庄屋組頭立会書付等致置  
後日出入無之様兼テ可心掛事

一 御米印ハ不及申

一 公儀御用ノ儀何方ハ申米ハ共日付時付少ハ無滞配存其  
外何ニテモ先々ハ急度相届受取手形取之相違無之様可  
仕事

附ノ御米印又ハ御証文モ無之人馬差出ハ様申通ハ  
メハ万一有之其品怪敷趣有之ハハ注進可申事

一 從党ヲ結ハ誓約を交シ常々公事出入を好シ建事ハ携る  
モノ有之ハ可申出違吟味頭取ハ不及申一味ノ輩科ハ輕  
重ハ隨ハ急度御仕置ハ可申付ハ隱置ハ其五人組迄可  
為由事

附ノ惣テ公事出来ハ儀ハ百姓困窮ハ基ハ條常々互

二可懐之郷中ニ而騷動ヲ謂數俄又以不意ノ儀出来  
 以早ニ注進且又許狀願書等差出以何事によら  
 才庄屋組頭へ申断庄屋與印取之可差出庄屋與印  
 無之日不取上然といへとも庄屋に對し以出入願又  
 以庄屋私と構へ與印不致願又以取次不致願以直  
 二佐伯役所へ可申出以吟味の上庄屋可為越度以勿  
 論許訟人非義と申立庄屋組頭申聞以徹ヲ不致承引  
 庄屋與印無之訴狀願書等差出以是又吟味の上急  
 度可申付事

一許狀願書等差出以節庄屋副次しもの私を構不取次以  
 佐伯役所へ願の趣委細相認訴可出以披見の上巨細遂吟  
 味可申事

一行衛不知者一夜の宿し不可仕以旨前被 仰出以連堅  
 可相守以惹て人宿の儀何者ニ不限往米手形取持以共庄  
 屋五人組へ相断の上可為致以縱親類縁者たりとも致違  
 留以ハ其庄屋五人組へ相断造成者に以ハ庄屋五人組了  
 簡ニ可仕無把子細有之永遠留仕儀以其段可注進事

附り他所へ奉公敵高費等ニ付罷越以願又以用事有  
 之罷越以以、願書差出往米手形取之可罷越以事  
 一由所不知衣類諸道具惣てはつしのかやもの類一切買取  
 申聞敷以古の品條ニ取又以預り置申聞申以縦出所知れ  
 以者ニても請人無之貨物取申聞銷以且又衣類諸道具金  
 銀米飲等ひる以以早ニ申出蓋圖ヲ請へし隠置後日於  
 頭以可為由支以事

附り盗人の届又以被盜以贓物見出其届有之ハ庄  
 屋五人組立会盜儀仕埒明可申以縦何様の□も中  
 未以共疎略仕聞敷以若油断いたし其盗人父落致さ  
 せ以願 之贓物為致紛失以其者以不及申庄屋五  
 人組違可為越度事  
 一前被 仰出以通唐船荷物扱買候儀日不及申紛敷唐物

他所を待米売以者有之ハ以一切不買取宿仕問□以勿論也  
 所へ参以て疑敷唐物一切買取申聞布候事  
 一商物故なくして俄ニ高直ニ賣出□分の利息をむさばり  
 ましき事

附り下直に売出といふ共一所ニ没込置しめ買以賣  
 仕聞銷事

一人売買堅御制禁ニ以且又奉公人以年季を不限譜代以召  
 仕以共可為相對次第但本主の障有之日 不可召抱勿論  
 一季半季居之ものをたりといふ共慥成請人取て可抱事

一御年賣米の儀前、の通随分致吟味米 米指入念初秋稻  
 菊上の節ハ百姓銘、作高の内上米の分御年賣米除置不  
 米の方を以作徳飯米又以小作入上米ニ可仕以尤懸俵格  
 極、入念御申定の通費目相揃以極ニ可仕事  
 附り銀納の分日限申融次第無邊滞上納可仕事

一御年賣割附出以節村中大小百姓入作の者連不成立会以  
 上割付談聞無高下致免割本途小物成□夜□時物共銀米  
 大豆売人前宛委細書付小百姓等追疑鋪不存録、具木か  
 ち□と申聞古書付写させ免割帳銘、印形致置御年賣相  
 納以度、小百姓へ庄屋方が取立以買數受取書可出之尤  
 百姓共銘、御年賣大豆納込掛札庄屋方免割帳納与付違  
 突合若相違の儀も於有之日其段庄屋方へ相尋可申以万  
 一庄屋方にて埒明不申以以其段早速佐伯役所へ可申出  
 以且又御年賣米帳申融以日限ノ通急度可上納事  
 附り御年賣米銀聊の儀以ても庄屋と百姓と差引勘  
 定不仕庄屋方へ相渡品以其時、ニ相渡何、ノ入用  
 と申儀細細ニ受取書付取置且又百姓共へ可割返品  
 是以其時、割返明々勘定相仕立可申事

一御年賣米大豆石代直段の儀年、其年の直段相知次第村  
 高札場へ板札ニ相記掛置以儀ニ以開村、木、の者共  
 迄右の直段写取銘、米銀石代銀納庄屋方申融以割賦

過奪得と突合見可申の七聊にて相違の儀も其段  
在屋方へ相尋猶又難心得儀も其趣位伯役所へ可申  
出支

一 村中諸入用の儀入用の度、在屋組頭惣百姓立会吟味の上  
上割合何の入用と申儀得と末々のもの共違承届の上  
差出可申の尤何の入用何程と申儀白紙帳面に其時、  
惣百姓立会の上相記置年、正月中右村入用帳位伯役所  
へ差出改受可申事

附り古白紙帳面ニ相記の村入用の外決て稗成入用  
無之様ニ可仕の万一相背材料ニ難立入用割合の良  
吟味の上急度可相答事

一 御年貢引履々落致百姓有之其五人組在屋組頭日不及  
中惣百姓違可割掛の間初秋より御年貢の儀五人組限り  
致吟味滞儀有之は在屋組頭相談の上其旨書付と以致  
注進差圖を可請事

一 御年貢米大豆御蔵へ納儀在屋百姓立会兼て相触の通  
米指儀俵外目等吟味を詰相納場帳ニ米員数老人別ニ記  
之納の百姓印形為致在屋方へ銘、小札可出之御蔵封印  
在屋組頭相對致置立会可致津出事

一 御年貢米大豆御蔵へ納置の村中ノ者共火々番可仕  
の風雨の節は別て入念常々火元用心大切可相守之若  
御中又隣郷ニても出火有之は早速出合措き入消之  
尤御蔵第一固可申事

一 火を付の及見頼の早、可申出の惣て村中常に  
火の元入念相互に罷末無之様可仕の尤出火有之節へ村  
中へ不及申近郷より馳集ひて可消之火鎮りの以後火  
元の名焼失の家数時刻等妥細書付可注進事

附り火消道具格置所場在、在屋宅或日寄会所へ可  
差置の事  
一 御林の竹木伐取の儀日不及申百姓自山たりといふ共差

当入用等も無之に伐出申間敷の無把入用有之伐採のハ  
、其段申出可請差圖事

一 御料にては私願にても入合の野山謬論無之様ニ常々可  
致吟味銘々持山境目是又可亂置惣て草木の根無放掘取  
不中山林に苗木ヲ植田畑に山崩砂入等無之様可心掛事

附り山中ニ焼畑致末の所ハ格別不仕未地ハ一切焼  
不申の無放して新規に野火付の儀仕間敷の且又作  
場へ牛馬を糞ニ放し申間敷の事

一 金銀銅鉄錫鉛硫黄明礬水銀辰砂丹土白土等の類何にて  
も新古山共開掘望のもの於有之は其段願出差圖の上開  
掘可仕の万一内証にて隠れて開掘仕の儀御仕置可被  
仰付事

一 舊白鳥取の儀は勿論惣て珍敷大鳥取申間敷の事  
一 新規の寺社建立の儀は不及申惣て堂目、若大寺成石  
塔供養塚等新規に立の儀御停止ニの勿論有米の塔破却  
の儀は不及申罷末ニ仕間敷の并寺社有米境内外撥費  
ノ不申七修廢ニ事新社堂居所共ニ少の所にても建在ノ  
中間布の且又古米寺等有之は、も只今寺地にても無之  
場所ニ堂又は寺院取立の儀日中絶の寺号ニの開新地同  
前御停止ニの条右の類違の寺社有之は其材より可申  
出の若隠置の儀在屋組頭可為越度事

附り無秋子細知有之は其寺社ノ寺社奉行所へ相違  
差圖の上位伯役所へ可相請事

一 山伏行人處無僧索美寸降躰和加打其外儀多乞食非人  
の類所へ居米の分其通新規に不可差置若右の類御林  
又は入相の山野ニ隱居する様ニ常々心可申事

附り捨子堅仕間敷の若捨子等見当りのハ、村中ニ  
ていたわり置可申出の捨子の儀吟味の上相答  
可申事

一新規祭禮取立申開舖有未祭祀たりとも仕末通ニ不可

違ふ於在家ニ旅ノ僧ニ法談設法致させ問敷ル寺院ニテ

他所ノ僧ニ法談設法致させ以テ其段申出可任差圖事

一仏神開帳いたし以テ柳中口不限他國他村へ参開帳仕

外共前方其趣可注進又及他所ノ神樂送來儀或儀有之

外共曾テ請取不申尤村中ニ少ノ間モ差置申開敷ル事

一葬禮手奉ノ仏事或は禮札諸事ハ云々ノ祝儀寄分限分輕

いたし百姓ニ不似合結齋仕開敷事

一勸進能相模標置其外見セ物芝居ノ類仕開敷申且又遊

女ノ類育來所は格別新規ニ差置儀堅御停止ノ事

一牛馬賣買仕ハは跡々由所ノ開届能ニ遂吟味請入ラ立手

形取替五人組へ相断売買可仕ハ不齋成牛馬買申開舖事

一父落致ル者有之日早速可注進申且又他所より越來ハ父

落者有之日其子細開届出所人殺委細書記可注進事

一殺害人自滅ノ者行割者有之ハ其所ニ番人ヲ付置可注進

事

附リ他所ノ参ハ手負ハ不及申郷中ニテ手痕ニ負ハ

モ有之日見居次第早速可注進申且又落路ニテ煩

附リ口論仕火ハハ背騰差藤ノ類持出開申勿論加

勢不可致ル若病付ハハ打擲仕ハハ立居難成程病

狀ニハハ(理非)ヲ不論相手急度曲事可申付事

一五人組ノ儀申場日家主在家ハ最寄次第家五軒宛組合家

抱店借地借リノ者近村中老人モ不致五人組人別ニ入可

申ハ尤村中面ノ下人等其外出家社家神子山伏等ニ到這

惡事不仕聚ニ組中相且ニ可吟味仕且又常々家業無之心

立惡鋪人ニ妨止し或日喧嘩口論夜出る等仕在屋五人

組意見ヲモ不承引不届者有之日書付ヲ以可申出ハ從申

立ニ不成惡事ニテ見届ケル人極ノ者有之日是又可申

出事

附リ五人組宗門最極テ公用ニ押ハ印形ノ外用申開

敷ハ若落ハハハ又ハ子細有之印形替ハハ在屋組

頭御役所へ可断其外ノ百姓ハ在屋組頭へ相断何月

何日ハ印形替ハハ段記之印鑑在屋方へ取置可申ハ勿

論印形常ニ手放シ申開布支

一他所より引越永々住居致度者申者有之とも又及当分住

居致度由申者有之日侍穿人ニおいて以住所ノ儀主人ノ

構無之旨証文并宗門寺諸証文取之書付ニ相添差出之百

姓所人日居來ハハ所ハ在屋五人組より構無之旨の書付并

寺証文取之是又可申出且又他所へ引越ハ者有之ハ此方

人別相除ハ段先ハハ申届ハ上申出何れモ可任差圖事

附リ他所ニ致奉公又ハ他領親親方へ罷越年又致有

之ハハ組ニ離れハハ以後所へ立御ハ者有之日其村在

屋組頭方ハハハハ相断構無之ハハ其致書付ヲ以申

出可任差圖事

一百姓子供諸親類ハハハハ侍奉公ニ由其後在所へ引込ハ

者先立より合リ林受ハハハハ指ハハハハ儀御停止ハハハ

一錢炮限ニ不可打之旨被 仰付ハハハハ通リ堅可相守之ハハハ

前々ハハハハ為渡世獵仕未ハハハハ者ハハハハ一切不可打ハハハハ

儀兼

所へ申届其上ニテ可注進事

一惡覺并益人有之將ハハハ鳴ヲ可立近郷ハ者開付次第相互ニ

馳集可申ハハ自然堂宮山杖口ハハハハハハハハハハハハハハ

一燈籠口論有之ハハハハ在屋組頭出會可取捌他村ニテ喧嘩有

之者馳集問申ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

て証文差出外通急度得守持主の外親親子兄弟たりといふ共鉄炮貸借仕聞鋪外七鳥獸作物と荒し難防ハハ其級訴之可任差國事

一 不依何事跡々々中波外儀ニても時節ニより百姓迷惑仕事自有之は其品申出可得下知元御為ニ成外事以小分の儀ニても無遠慮可申出支

附リ何事ハより十相尋外事共少く不慮可申聞外儀

一 佐伯後所附のモカハ不及申中間小モカハに到達金銀米鐵衣類諸道具其外何ハより寸「物種物并寄借堅仕聞敷外檢見其外御用ニ付家等并御代官村方へ罷出外符及定外木錢飯代野菜代請取之具外買物等所ハ相場ヲ以賣之代物受取可申外七泊休ハ宿取繕端除等ニ到達馳走ハ聞敷儀一切仕聞敷事

一 遠酒の儀定の外多造出外儀御停止の事

附リ有米物ハ外新税の請高賣仕外ハ佐伯後所へ申出差國可請事

一 新市場立外儀御停止の事

一 市場外夫ミニても新規の質屋相給外ハ其段額出可得差國外但質に取外ニおいて及能く入念ヲ慥成証人馬立可取之紙親類縁者ニ外共不審成モノ持来外共少ハ聞ニても請取置申聞敷外事

一 在ハ所場共ニ有米家敷の外田畑を漬し又ハ山野空地外ハ共糞ニ建外ハハ聞布事

一 鮮飯養子取組の儀庄屋組頭五人組立会能く入念望て六ヶ敷儀無之標ニ可仕事

一 跡式の儀兼て書置致其者の親類縁者并止人組立会致加判死後ニ出入無之標ニ可仕外事

附リ跡目無之者不意ニ死失外ハ所持の品々親類并庄屋組頭止人組立会請色帳面ニ記之立会印形致置

一 寛延三年午正月廿二日 相續ハ上書有テ以跡目經籍目と紀錄可申支

御殿御勘定所御書付ヲ以被

仰渡外ハ御所所圖ハ百姓共御取「」并夫食體貸等其外願筋の儀ニ付強訴徒党逃散等ハ儀堅御停止ニ外起近來御所所ハ内ニても古弊ハ親筋ニ付御代官所等ハ大勢相集致訴訟ハ儀も有之不届至極ニ候自今以後嚴密御吟味ハ上可被行重科外旨被 御出外聞取ハ首違方ハ趣堅相守強訴徒党逃散決て仕聞敷外若相背古禁ハ不法ハ儀相企外モノ有之外ハ当人ハ不及申其於庄屋組頭迄嚴重ニ御仕置可被 御付支

附リ古弊強訴徒党逃散ハ儀重刑禁ハ段寛延三年午正月被 御出外御書付御村ハ庄屋組頭重立外百姓定ハ張置キテ日下ハ小百姓共違古制禁ハ段能く可申聞外七古御書付ハ家毎午正月中新規ニ相認張替置可申事

右の條々堅可相守之若相背者有之ハ急度申事可申付者也

文化十二亥

(以上)

— 考案 —

一 新定考案の便と考案六十三の條に誤謬を訂正した。二 亦るべく原文のままとしなが、初めから漢字は正し、又度伴飯名は昔通常用の字及び名とし、片仮名はそのまゝとし。三 常用の文字、ハハ假、ハハよりハそのまゝ用いた。四 明らかハ假字と思われるモノ、文字ハ誤用と思われモノ數ハ所氏、その誤り書きを正す。五 口でそのまゝ記してあるハ文字ハ「」し判教出来なモノ。六 句讀点、半段名の濁点ハ原文にありすて打へてない。

(封)

明治四十一年（三十八才）

六月二十三日、神奈川県茅ヶ崎南湖院で病歿。

結ぶ

独歩を中心とする近事画報社も、日露戦争当時には景気がよかつたので寸分、競争の終了とともに経営は思ふように行かなくなりました。

更に明治三十九年六月に、独歩社を創立しました。翌年破産して、独歩の事業熱はここにおいて終止符を打つたことになりました。過労の結果、独歩の健康もそこをわけて病勢を亢進し、三十八才の若さで、六月二十三日その生涯を閉じました。

城山頂上にある独歩碑の裏面に刻まれている「昭和八年六月二三日建立」、「昭和三十一年六月二三日再建」の文字は、独歩の死去した明治四十一年六月二十三日と一なかりを持っていきます。（この項終り）

本誌と御仕置五人組帳

整理と、今回分の正誤もそとて

五人組帳は言うまでもなく藩制下の江戸時代、いづれも同じ藩制組織で、凡ゆる取締りや執務記罪等については、連帯責任を負わせたものである。江戸時代の民政の実態をつかむのに手とり早い資料であるので、本誌はこれまで度々とりあげているが、幸い今回岩田会員の読解提供があったので、一応整理して見たい。

標題と箇條	巻令年月	記	示	時	藩主	本誌掲載
元祿所定の條	元祿九年九月	一六九六	齊氏高久公	五〇号、三頁		
御仕置五人組帳	享保八年八月	一七二三	六代高慶公	五一号、八頁		

享保五年條の定條	享保八年五月一七二二	六代高慶公	五〇号、三頁
寛政五人組帳	享保三年十月一七四二		
御仕置五人組帳	文化十二年一八一五	十八代高慶公	五一号、八頁

（註）前表一及二はいわゆる五人組帳ではないとも考えられるが、刺違が深いので掲げない。

尚五人組帳の取扱いはついでに、本誌六十八号三頁に「御仕置五人組帳」と題し、赤木村大在屋文書中のもを紹介しておいたので、参照されたい。次に正誤、本号11Pと12Pの資料に編集子に次のミスがプリントがあつた。御訂正を乞う。

- 11P 下 潤沢ニカ次は外とモカ三字挿入
- 12 下 8 証文の火に三ノ片後名を加へる
- 17 朝 ではなくて 款 加正し
- 13 上 5, 18, 28 三ヶ所 願の文字日はずれと 款の字である
- 14 上 10 割合は日 割合は日
- 24 常 常
- 25 下 鉢扣 鉢叩（日付たきー空也念仏）
- 15 下 4 家主 家並（小女女）
- 組合 組合（小女女）
- 13 休とも 休款（小女女）
- 14 之五人組 之の火は前カニ字挿入
- 16 上 11 家等 家来
- 19 夫々 在々
- 下 8 被行重科 被御重科

又この五人組帳所載者について、訂正の通り重大なミスであり、先礼の点おわび申します。度々、本五村因辰カ高野氏よりご教示がおりました。前号（五月発行分）番五川金貨物段、書出し（23P）の洪水は十月十九日ではなくて九月十九日の誤り。ご訂正ありがとうございます。（以上、編集者用紙 弘）